



80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6

題林愚抄

卷之二

卷之三

閩中雜文

卷之三

卷之三

初秋

六度食歎といへりあくとえはくあのそくもとそゆのまへあひゆめ 女房
曰 献うもと歎のそく結ひタマノ風よほのひちとさりを 俊成女

卷之二

卷之二

文
選

七
倍
至
ふとへきとをうよみかへり。そのあをよまんまく
め
うきのよりとめーとよもあらねやう。あよかふとへ
ま
あとあひあひ、あはるのあよかふとへ

後山先生集

一至於矣 徒は捨てあはれぬ所の如きをまつたのがやうに我
恵牛女志 既捨 七夕のきの夜と引ひもくそめわるゝへきりん
ニモ適毛 窮屈 未だ星のほりしとあらゆるを汝そぞえ

西院
二條院
右大臣

かくの内も亦ハラミをちかう一色よひとより
鐵女姿久 窓板 ありのわま乃も本とあそびやうあらうと
七夕焚 乾千 ちゆふ秋と葉マリとみやうるをやうむとがくと

後編
序

新拾 七夕の夜はうららかにて一束の糸よひへんともん
支與久 勇斗 ねとすらり糸のまろ、まくらを糸やくねまくらみて
鶴拾 矢和三毛三毛 いくねもくえの糸や七夕の約ゆく人ある一束がまくら

今不二年以當
往空

日　セタハシキナガヤセモ年重ハヨリカモカトモ乃ハシキ
鏡方　ツノキの長乃一より木々も立葉ハリテ早合のうる
鳥石　セタハシキナガヤセモカモカトモ乃ハシキ

卷之三

七夕月　十五　今うその月もやきそ笑えんや　ハ雲の乃り　あひのそゝ
に　セタ乃笑アマラルヤウカ　アキシヒの月　カムヨミカム

中郎之子也

四

やのありえをぬきる夕はくよわきり星合のをとすて 李稚
久月よかとくらひまつよひまくくわみのそり火 云階

まちより用へせめにほーもくよをひり星合乃そく 非能
えぬとて先のゆく尾もともわよ列星合のとをまくと
り合のうきぬかこのをの東よ半ばうらみ人ひた も

唯繩

己上同

冬のあまび里食のうきそくをかぶらよひの月トある
見ゆれり、まつら月のぼうつゝも里食のうきそくを

あはやすとこれゆゑくよおがほくをもとめゆみを
きらあきの林乃秋をよ月の夕をもとめゆみを

乃を
乃を

老夕雲

おもひておもひておもひておもひておもひて
おもひておもひておもひておもひておもひて

同上

こよみの心をわざと墨会のとて風をうけん 実見
よそにくもくとや えふせたるよのとひをも 丙秀

卷二十七

星谷のまちをいたる處へそぞれがよ敷のものと後山

星谷のまちをいたる處へそぞれがよ敷のものと後山

卷六

七夕夢

綱目

夫ゆきのふよろあひ風よひあひとまくらくよそみの傍、光の里をもむ
七夕の夢の夢の波より春はゆくのやとやもそく

內
卷

夫酒をのぶまつらあさ風よひあひとまうくまくまの榜
七夕の夢りぬまの波より春ひゆふのねとやもまきく
漆とまゆひみえく七夕のま乃れ神のしの川を
めぐりあむそ夕はあ乃むうくまふとてする秋乃やま
る節

あえぐ
ゐるやう

七夕

卷之三

秋葉の山に登りて、木々の葉をくみえうら葉で、まことにあま乃山より、あやう

上卷

郭子

宗廟祭享之日
天子之子也
其子之子也

後後拾
卷二

七夕詩

同文
卷之三

おもてのうへ
おもてのうへ
おもてのうへ

卷之三

深きもの故なりや。此は絶えず幼鳥の力食ひ。因白 良基云

物の事は、もとより、
物の事は、もとより、

勑

かうえりてゐる。お母の娘の女房は、お院本

同
卷六

卷之二

かく死んでゐるが、てつたのをちうとうされ
る

義あらわきよこそをもひあくをまのうへぬもくをめ

七夕

後漢書

卷之三

行中納言

八

後漢書

卷之三

えむかとて聞ゆきてやあまの川をくわうのやうにあらう
えまくのうと一セイくらうのやうにあらう
えほりありるとやうさんわをあひてよきよさう
あああさくとつよとひとをうれてうきせうがさう
えれへれのうとくらはは星食のあくべぬくべうや
いあくよくゆくゆくはみのそめきみや星食乃是く
あくよくゆくゆくをもとえほり黑こを以ひきかしもく
かくよくゆくゆくのうへんへん

卷之二

卷之三

七夕流

卷之二

ほまの門へまよひをとせぬれ年じあわせはうそくまくらん
いせの海やあまのゆふよほくらんこすひなまや草食のま
りかみのえやくはうさんうてあま乃うそくまくらん
ぬきあらまくまよのうちうひうらうくまくらんのほ風

二夜とも又かとばかりのまゝのうあつてゐる
茶のむせのひとの豊かな歌詠ひに附合ひも

卷之三

先輩の御事仕事等を察り御みを多のを
祐ともう義のと風ハセタ乃あすと云やれとこうすさん

うのをさうむじきをよひれど二の室のかずを立た
つねにゆきとすてもたむきんあうをよせむら乃とよ

先生の原稿をさういふとおもひたが、その毛
勢うねる方へはそれよりまた年ひとづきとまわらずやせん

ひやひりひのうをめん

莫もまく今もタマのアラシヤリモトシカクシムの如

ぬめおうやうの鳥とすま乃あゆよそりかく翁をハ傳へん

お仕事の事は、おまかせ下さい。おまかせ下さい。

秋毛もあざく彼のせとされ、そつていよいようとうまく

七
卷

一
卷

卷之三

後漢書

光の後あくまと山里よりもあくはきるに春の院うち野と
なりてよしむすうりをひせわれしを経のく事よとせ後かと
年とやくす百様のそせタ乃のうどとおや衣うとキ
タノハナモアヒトモあらうとめととれ織女よ秋がくと
タ乃の衣と吹うとねよみひじうね秋乃のうとセ
あひとと秋へアセタ乃のうとれようきわうえのうとモ
後後拾 織女よ秋がくと秋と英のまきと
月 売出 七タのいやうと秋がくとおととくと秋と英のまきと
年とこのをの衣と秋がくとおととくと秋と英のまきと
あはうとと秋のほとやその衣をりわひのまき
日 新千 七タ乃へやうと秋がくとおととくと秋と英のまきと
ぬきとアヤうと秋とおととくと秋と英のまきと
九月と八月の衣と秋がくとおととくと秋と英のまきと
日 新合 七タ乃の衣もあくと秋がくとおととくと秋と英のまきと
新後拾 織女よ秋がくと秋と英のまきと
綾古 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
支綾 年とととならぬ年のうと秋と英のまきと
月 あひとと秋がくと秋と英のまきと
あひとと秋がくと秋と英のまきと
通えて

七夕縁

七夕舟

弘農
新千 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
綾繁 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
内繁 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
日 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
日 上日 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
支綾 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
綾繁 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
内繁 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
日 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
日 上日 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
支綾 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
綾繁 七タ乃の衣と秋がくと秋と英のまきと
内繁 七タの衣と秋がくと秋と英のまきと
新千 七タの衣と秋がくと秋と英のまきと
新拾 七タの衣と秋がくと秋と英のまきと
綾古 七タの衣と秋がくと秋と英のまきと

十一

十一

續千 わきめへは風のほひぢうり又神わくもけ下アシタから夜
空スカイ大望月
内ナカニまことに風の音と吹風よ神のかきへますか御心に
思ひ出せ
前半 前半と後乃かくともあも夕月表院やも乃かり念のを 後一章院
後後院アフターハウス 大きなひきあう社の秋風よううへとさ乃別をうちうり 美哉

七夕胡

織女約

一
九

卷一

凡

四

續古

續拾

七
拾

E
6

10

卷之三

四

卷之四

後拾

卷之三

卷之三

續古

四

弘
文
院

四
三

玉

續修

卷之三

卷之六

卷八

秋とあそぶところとをとらざれば、まことに秋の秋乃上風
内合
物の吹き声より、あまく原風のあはれうるすも、あまめり
秋をもすてひまく夜よどりの宿乃風をもすく、夜降
はまむらりとくらはみをいたしまとひ宿を、秋の日暮ハ、通玄約ト
宿をもすかや風とまつてよなと云ひ、おまえをもすく
己上日　およき清め秋の月をもすく、月をもすくと云ひ、おまえを
後拾　秋乃くに吹き生風乃まくち里とおもくすらん　後人
後後拾　今うちの匂乃下紫とまくすまのねうての秋風　建保一四四合
新キ　とよきをへだす月、ときれく秋もすく　非狂
新後拾　やまときう民のまよせとせうやよのしたのれおのれ　建保一四四合
後下　か山からすのとまくへとせうを、をむすよろがうせ　建保一四四合
日　うふせん氣はうりて秋風の吹よいと、わくたりと
後後拾　うんをたうと、うく風かくやれのとまく、うく風か
弘元　タされハ、翁もとれも、わくやのとまく、うく風か
月　ものわくもれりと、おもむく、うく風か
玉　吹きうりと山よひく、秋風よれのねむれをすく
匂き秋風後拾　わゆのるあく、うのやまく、秋風よれのねむれをすく
匂き秋風後拾　わゆのるあく、うのやまく、秋風よれのねむれをすく
匂き秋風後拾　わゆのるあく、うのやまく、秋風よれのねむれをすく
匂き秋風後拾　わゆのるあく、うのやまく、秋風よれのねむれをすく

山家秋曉

新古
後拾

やうに立ちおまかで仰て歌の声よ軽風をさく
山里の音ひねまどあくまづくわらそ本枯の色をあえびあ
後れ

因承秋風
秋風入簾

卷之三

後千 父の御子は滅びをまもる神乎考やむすうね狀乃々くと
後後裕 入りよりやうじてよせん白鳥も神乎とそわらぬふすまうる
曰 いふ
考をあもうてあきまく外のあくわやうりて爲めに進
新平 すとおどりのとひすれぬへ度のをくわがつて考ふ世

月 月より氣を衣ひてせへせりとくわき乃々有る
風 亂喜不ありしもの、うちよしきと従教のよれ
に トモニ
未元日
風 鳴かす前あるまほに、未ハ前て下望よみじもじたり
同 未からうとくの神よ見られてまるもあらぬ國の事
新古 未ちくもろうしたうるをのそくとて御幸あれ
月 ねと御もりあらうひと神のりともういきまう那
内 殿保一
秋風 と山風、うやひきのとくとてあれよハ秋のとく
月 月
同 未からうとくの神よ見られてまるもあらぬ國の事
見院 未
王 入らるる月、内こそれあるを乃ひ川村
元氣
初見院

卷之六

2

卷之三

秋風集

後漢書

郭後格
ソウルのとどひもあきとあくのと物語
日
問
要文
問
詩
今うやまのうみよはおとてせよつれの夕く

み世
み年

卷四

同
李
子
雲

されどもひのきの山は深かつて、此の城乃是よりは
あくまでも、山を越へて、北に進むべき道なりと見
る。高木

彷彿
希肉大旨 基本

身のうきとひとごともしておまかせをひけりきれの後
事はもひもくとおこなれ内とおそれ林乃タニモ
ゆくよ田ひの事とおまへにむくのあこがたタニモ
さうゆうとありと、わざとさうされめり也と林のタニモ
林のうすよりかひふきハ子ノヤの筋。やタニモテル
アヒシキハ人のよもううりて、あ男かいのり船乃タニモテ
望とハそのよもよもるされともタカみひ船のうそ、
船も吹のきられねれはれとこもそあひ船の反手。玉を船
を木立とお月夜とお魚と林の事とそくなよもくもん
この船がひきうちあまうふ舟とちもや夕乃あられとくらう
じよき良船のうそひとさうりやとさすとねとくらえ
己上句 林主そハ高舟ひきうねをすくめタのうそとなくともむしん
あ民郭下

卷之九

いふよもやのむすびのうちにゆくわざ

同 同

を失ひては、其の事に難を蒙る。あらゆる所へまわるが如きの事
は、必ずしも、其の子の爲めに、心をこめてやる。されば、其の子
は、必ずしも、其の心をうけ取る。されば、其の子は、必ずしも、
其の心をうけ取る。

卷之三

元秋の頃は、やがては、下りて、夕暮れ、云雀の
音も、ひびく。と、夕暮れの秋乃夕れ、正氣を

列傳

卷之三

御はよわく殺とて死を力の下するぬ。折夕に至
て、あらわすあり、あらへゆるやうに思ひ、

卷之三

五

おまよのむのれにそむり音と歌のうちをえん
同

卷之三

三
御子の如きをうめむ間をとるあらうの秋々
左中右
左角と奥の如きやねが夕方の小舟もん
右中右

卷之三

卷之三

近頃 わたくしはひまつぶしのためで
日々 うきあいのことをよくするが、
そのうちの一つが、おもてなしをすむ事だ。
うきあいのことは、おもてなしの事だ。
おもてなしの事は、うきあいの事だ。
うきあいの事は、おもてなしの事だ。

筆者二
内大臣
日
きらくの間とおもひ渡つておこなはれ
お内大臣實體云
かくさんあらわの事とせりと
の事とまことに

山里からやのまの山のほうをあそひた。これあると
うれしさもひととびうれしさがよきよきと秋のうきらめく

まえうれしきをまことにあつたひよしめでまつるをと
新古 そらゆめかづきとのまことひねこまつうせのゆうき 佐助太政大臣

可
もとアーティストの歌を歌ひ夕方よりをよ。音頭
の歌うて今までもタレの歌うてそれらをよく。お家

月
うの秋をもつてあまつかへる身をぬけた。ほんとうに秋が
風
又月をもつてあまつかへる身をぬけた。ほんとうに秋が

山齋集

壬

閑中秋夕

植物

三

10

卷之九

卷之三

卷之四

千

卷之三

卷之三

核政委會

後拾 うれむはあらうるるのまがともとく乃麻を發して也 源氏物語
王 おん今うひとさんひとりまくわらうのやハ松風のう波 院
教拾 ほほうゆえをまされゆきのまきのく景の松乃タクレ 聖壽院記
號取 やまと風をまかみまつれ乃まの松ハあらそくもけり 信貴山院

後半
先づ吉原を出立す。あやめを乞ひ
舟石
乃よられて年六つとなりて今又あらま
ちき
養氏丙子
三月
身のまゝにあらま
うのまゝにあらま
身のまゝにあらま
うのまゝにあらま

新松
萬葉集卷之三
沈隱侯
達保一
神のみにありひまくもて高ち亦を枯風くもく
乃能院
卷之三

月あらうこれのへよまつてえをうちれぬ高のやとうせりかわぬ
夜陰
和泉守兼連の筆也

うるやかにすくはるの心をもつて、かくの如きの事は、おまへがおもひたる如きの事ではない。おまへがおもひたる如きの事は、おまへがおもひたる如きの事ではない。

向
居氣味を含
めぬよきと謂ひや御見下のふとれよもん
記附文

卷之三

十一

嘆歎のみあつまつれのそとづくはるはりタリ後
えりあさうゑのよせよどみそとづくまろりのタシ
きおうちうがとあらまちとんび吹きとて度乃夕風
己酉 タクシよりひのまへ風きくおうむ乃あてこわさ
新季相 大袖

西山向
新家相
私業
於ハヨム子時乃ゑのよきよ絶ひくもの乃ト仕事
修毛毛
角あらむ後始詰
中リとのどや久おもかうまくさゝれ
秋風後齋聞之方

空齋文集

1

月夜早起
新月
暮夜映月
承元卒
三月廿五

卷之三

二

14

三

1

顯林愚抄十九

秋郭
一

卷之三

同

新古 月の経とひびくタまの声乃くもに風を
同 桂樹やさしく吹くは秋の音ひのきとあり
候十 かねハ秋の音乃ちやくよりくらむる風の音
新千 あくとも秋の音乃くはりの風の音
月 あくびの風乃くとりと歌ふてあるいとての秋原 あ内大臣
新拾 こゑてすと秋の音乃くはりの秋風 お義家
新度 痘乃くとまのれよせよと風の音とまうす
同 今うそとたぬくやとのうれ全秋の音風人なり方 部仲
新拾 痘乃くとまのれとまうすと風の音とまうす
同 ときくへる音風とまんういもと秋の音風 お園白
新拾 ときまういわとまうすまよ秋の音とまうす
秋風よそのまことうひを充乃まゆりあまめめなり め桂井
己上月 なみうに吹きまくとれを歌ふの音すまくと
新拾 あくびの音風やあくびの音風やあくびの音
下秋の音よ身うれとれを歌ふの音風やあくびの音
りとれを歌ふの音風やあくびの音風やあくびの音

卷四

三

卷之二

後拾

王

持中納言ニテ

あれハ秋風の吹き拂ひるゝくおほりともうな秋の夕それ

園目あ木坂大

ヒサシカツ一乃秋の花乃えよむとてか秋乃下を
新拾
キテくモ歌もかの房のくわくわくとてか秋乃下を
キテ

ト禁みはまうちむやとく説ん國乃吹くく秋乃下の

赤陰

まくらんみやまくらあのむきよなれ秋乃下の

女房

まうれ風とむまうれ風ひぬりくわしの秋乃下の

小宰相

季の秋乃ト禁みはまうち秋のくわく秋のくわく
己上月
新拾
寒乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

金石屋

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

法親王

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

基義

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

元親

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

安達

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

法氏

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

作鶴

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

入道

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

持中納言

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

後院

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

正御

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

後院

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

秋乃吹くとてか秋乃下の秋乃下のくわく秋のくわく

戸名權

10

十一

卷之三

新刊
六月五
七
六月五

我の身のまわりあれども、とてぬところをうるさく思ふ
事もあらずとも、すこしも、むきまとおじい様の如きの
月夜も、少し黒い星も、あれども、うちのこのとくは、秋風

卷之三

1

三
A

其の後は、その子孫の名前を記す。

卷之三

卷之三

千鳥

行
山里の
風景

乃よりもの量よかと勝の本よりじよ秋風にて
門界より風うちひきもあらじめ力弱く
久しく船のめうと麻のしまよひあやとくらむ
鳴き乃よりあはよどのおりし乃より敵うち

みゆき
あた
たか
ひや

已上同

あをや
猪口
鶴口
猪口

おもむくとあつてあらうが、まううなうる
うちもおのタとあつてあらうが、まううなうる
うち「田よかよや臂よいきよどくうな体よ
よいきよへゆー」などは、うちおのの歌
くをかねてひととせんの歌をうたふ麻うら

續句

十一

己上向 うりきうち御 じがのまをよそともや廢乃まよひうらん 右大臣
永能内 おうのうち内乃あくわやとびうる因面もれも廢をばらすを東が國

おうとうのあくやさびく一面もれと廣きうちを東が國自
さうのまよ山ひくもくうれりともうよしとあゆ木と
夕暮れの風とうみめて思へぬよ庵を呼うるめきつ
ある八月の参むのとてうりくねーうちかくと 実をも

己酉　はまのひのらひあとへさうのねよしめりえのまちへ
庵多々音　平　まくわこゑうゑどみ経ハ麻乃紳とえもてきくわ　是近侍師
教感鈴　後指　うひもうれらもとれとくらのくわもせぬ教の序ハ内裏
無教の事　後古　望、太の多きそくわれな方をはせむ事も多引上

内門石
枕乃つゝよきと床のねづりとてあらわし
次まよかにひぬくと床乃経へとくを紹め
多復歎

先麻
綾子
新桂
月
林乃よハねえの後トヨリ月乃もみの月ニハ麻モシ。先
月三五日休

内妻三内
空氣を
康智ニ
四十三
うふゆきと、別乃もぬとあはれ月す角やかくさんる年
七月のゆきあくよーへつよつとあるとあくとえん青水

月山あきらめのよしとの往來ともよきに見て麻を以けるもまことに
すとよきあきらめ骨筋よりかへどよき事なり

後後 桃とソバもそよれまのひもをもととて庵の事と
前半 細千 宅人乃紳をあくまよ衣あらひゆきこと
後後 細千 よくもいはくや多くわうりへふ下をま席をひかう
後三後 細千

同
をもひ
とのとももの本うへよしよもむけられ衣うへ
そも内やう月ようじゆあえもあうねくきの唐やよ
云三後後承

か山風は月の吹くといひてゐる。麻の叶」と織り、
女教徒師
今まではともかく麻の葉よそのものと教の織りによじ
おのまさらよその葉へ月影よぐもとて麻もぐもとて
おとせがちのあ題

卷之三

卷之三

教汝安人席

已上月 まき川朝市から出でたる。よし庵の娘とて、いとへや
やよつて、りわきの娘乃原よりもへんうらむし庵の娘とて、
終千
あそかうめの娘とて、ねじくまの娘の娘とて、ひるまつて、
志貴
ひの原の娘とて、おはとて、さくひの娘とて、おはとて、
絶賛拾
さくひの娘とて、おはとて、おはとて、おはとて、
春山
さくひの娘とて、おはとて、おはとて、おはとて、

卷之三

あてうあとすやれのゆよきもては。かくあれと急教を矣内
勤希
伏見院
三子を
もくとせんとくすれよそえくふ。とと廢れと後光で
ゆきよみをひく無いそらのくわの乃タクレ有者多
ひきやまのよきくあめでたきまよ發きよろるる事で
あくべとてあくふ無のよきでそとの乃松耶
我のくわとくわのくわとねとそくねタクレと松乃ふを序書方
已上向
あこじきの京乃まよやうかて唐のあらの勢の多
新経
みの乃くちれくへん角の今、ほよせとあとく
まき

田家麻
田家莞席
秋山席
洞庭席
虫

山ありて水ありて移え乃むくやまく扇の移乃とをまくらさん
王わに乃山ありて移え乃よ移えすて廉のうきぬ曳そられ
郭勅ひまちをえりめ秋風すれども廉乃とあとくま
同きはう乃わきめのひりれあらきとひアシのまとせ
金參毛うきのへよかひてまくとあと松のまくらひあら
あ前院六条

月

風はうとうとく秋の夕暮とてう寂とりへるゝあり

後主

秋の夕暮の跡よりあわやとをうかがひやまのむ葉
みゆや

みゆや

散りくわらじ乃ゑあらうとくちうようと虫の下よるく
みゆや

みゆや

なまうゑうれびへ參乃ゑのとくあらじやゆく
みゆや

みゆや

わらうゑうれびへ參乃ゑのとくあらじやゆく
みゆや

みゆや

えううのとくあらじやゆく
みゆや

みゆや

わらうゑうれびへ參乃ゑのとくあらじやゆく
みゆや

みゆや

秋虫

秋虫

秋虫

集

七七

秋虫

徐知虫

舊古

十六月乃新之えめりへあくらるるをひの下に生ひてうり
秋春は師

方夷の兵

月ち風

新捨

十六月のち風乃きよまへやと代へてよろな風のと
まし人をか

新春は師

虫取罪

新捨

十六月のわざらるの虫のとあれひと引よまきのう
花中ね良経

後三位の教

虫取罪

新捨

十六月のわざらるの虫のとあれひと引よまきのう
花中ね良経

花中ね良経

新捨

宋鷗賦

毛澤芳

著者毛澤芳著於上海乃鷗保養於下

